

あわれ亡友 : 文苑

著者	中内, 蝶二
雑誌名	龍南會雜誌
巻	49
ページ	37-38
発行年	1896-10-24
その他の言語のタイトル	あわれ亡友 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4562

文苑

あばれ亡友

中内蝶二

學友越友子の君病魔のために襲はれて校を辭し、療養手をつくま玉ひしも、不幸藥石その効なく、終にこの夏の初めつかた、長き眠につきたまひにき、隙行く駒の足搔はやく、今は、や十旬の日に近からんとす。今宵の月のさやけきにつけても、過ぎにまことのまのばれて、そらに悲しく、あふるゝ涙を硯にすり流して、覺束なくもかよわき筆の命毛に、亂るゝ胸の思ひを托しつ。

葉月十三夜

色かへぬ常磐の松に、千代かけて契りしことも、仇し野の、草葉にやどる露の玉よりも、げにもろきは人の命なりけり。

花吹き散らすつれなき嵐、月かけへだつこゝろなき雲、あやにくの世のためしは、かなしき哉、君が身に落ち來りぬ。人生五十年、死出の山、三途の川も、かぎりある身の終にのがれぬ道なれど、まだ浮世の旅のなかばをだにえしはてぬに、はやくもよみぢの闇に踏み迷ひたまひし、君が恨みやいかならん。

あはれ友子の君、君どわれど、さきの世いかなる處にしかありけん。互ひに生れしさどは異なるれども、海山遠くめぐり來て、同じ學びの庭に遊び、蘇岳の雪、畫湖の螢、俱に

机をならべてふみを講じ、問ひつとはれつ益するところ多かりき。或は花かをり露冷たき朝、手を携へて龍山の巔に吟じ、或は月清く風涼しき夕、杖をそろへて白水のはどりに歌ひしこともありたりき。君とわれど、ふたりの間のたのしみは、永劫つきる期あるまじと思へり。どもにこの學の庭をめぐり終りなば、やがて花の都の文の林にわけ入らんとはかりしに、思ひきや、幽明處を異にして、われは孤鴈の哀れをしのぶ身とならんとは。

昊天無情、まだ半ばだに敷へはてせぬ玉の緒をたちて、ゆく末のぞみある青年をうばひ去りぬ。あはれ鳥部野の烟終に絶ゆる時なきにや。

阿蘇の峯は巍巍として姿かはらず。されど君が身は既にうせたり。白川の水は滾滾として流つきせず。されど君が魂は已に絶えたり。予誰と共に今宵の月をながめん。われ誰を相手にこのふみを論せん。思ひ來れば何事も夢に似たり。筆をなげて眼を閉づれば君が面かけは髣髴として前にあらはれ、われに向ひても、の言ひたげなり。目をひらきて起たんとすれば消えてあとなく、風にゆらめくともし火の影こゝろばそし。折から月は雲間にかくれて、つらにはなれし孤鴈の聲あはれなり。なれも友をやもとむらん。

涼しさも今は仇なり秋の風